



産学官民連携の取り組み

サングリングループは、北海道の農業に貢献するための事業を展開するとともに、地域との連携も進めています。北海道に深く根ざし、地域に必要とされる企業をめざす当グループは、2025年に中期経営計画「もっと一緒に2027 Rooted in Community」をスタートさせました。事業方針に「産学官民連携の強化」を掲げ、地域社会にさらに貢献できる企業体をめざして歩みを進めています。今回はそんな当グループの連携事例についてご紹介します。

行政との取り組み

自治体との協定締結や寄付

サングリン太陽園がビニール加工場を構える夕張市に対しては、2010年より「幸福の黄色いハンカチ基金」への寄付を継続しているほか、夕張市平和運動公園のネーミングライツを取得するなど、さまざまな支援を行っています。市との取り組みの領域を拡大するため、2023年には夕張市と包括連携協定を締結。ドローンやデジタルテクノロジーを活用し産業振興や教育、防災など幅広い面での協働を進めています。包括連携協定の一環として、2024年4月にはゆうばり小学校に通う3年生の社会科見学の受け入れを行ったほか、2025年2月には4〜6年生を対象としたドローンの出前授業も実施しました。

2025年には、北日本スカイテックと、同社が事業本部を置く北広島市がまちづく



りに関する包括連携協定を締結。企業版ふるさと納税による寄付を行い、地域経済の発展やウェルビーイングの向上を目指しています。

農業者への独自支援に力を入れる木古内町や、福島町に対しても、企業版ふるさと納税による寄付を実施。木古内町と北日本スカイテックは、ドローンの活用を通じて持続可能なまちづくりをめざすことを目的に、2025年に「ドローンの活用推進に係るパートナーシップ協定」を締結しました。

スマート農業技術の実証活動

サングリン太陽園は、農業従事者の減少や高齢化が進む農業現場に対し、作業の省力化や効率化を実現するスマート農業技術の実装に注力しています。過去には国や道の事業に採択され、2022年度のICT牧草生産実証事業や、2023年度の宇宙産業技術情報基盤整備研究開発事業の中で、無人航空機とAIを活用したピンポイント除草や、飼料用トウモロコシの収穫期の水分率を可視化する実証実験を実施しました。関連企業や教育機関と連携してスマート農業技術の効果を検証し、さらなる普及に向けたサービス展開について議論を重ねています。



ドローン操縦体験を通じた交流

年齢や性別、国籍を問わず楽しむことができるドローンサッカーを活用し、ドローンに触れていただく操縦体験会を開催しています。これまで、TECHNOLOGY FARM西の里を訪れた農業関係者や、北広島市の友好都市・サスカトゥーン市(カナダ)の高校生訪問団など、さまざまな方に体験していただきました。体験会を通じて多くの方にドローンに興味を持っていただけるよう、今後も地域のイベントにおける体験ブースの出展や、全道各地で出張体験会も行っています。



教育機関との取り組み

農業系をはじめとする教育機関との連携

サングリン太陽園は、道内各地の高校や専門学校、大学などと連携し、次代の農業を担う若い世代の育成を見据えた教育に参画しています。

北海道立農業大学校とは30年以上前から関係を構築しており、被覆資材や農業用ビニールハウスに関する講義を行っています。また、北海道ハイテクノロジー専門学校がスマート農業を学ぶ新学科の開設を決定した際には、カリキュラムづくりから講義まで学科の運営に幅広く携わらせていただき、その後連携協定を締結しました。



ドローンを核とした北海道福島商業高等学校との連携事例もあります。過疎化に伴う入学人数の減少から廃校の危機が迫っていた同校では、魅力を高めるため授業でのドローン活用を決定しました。同校では1年次にドローンの民間資格である「ドローン操縦士回転翼3級」を取得することで、ドローンを活用することができるようになる。生徒への指導は、北日本スカイテックが運営するスカイテックドローンスクールのスタッフが学校に赴き、行っています。

農業を学ぶ学生の取り組みや、学校の魅力は、サングリン太陽園が発行する「太陽と水と土」や、当社が立ち上げたスマート農業共同体のWebサイト「SAC WEB」でも、発信しています。

酪農学園大学との包括連携協定

サングリン太陽園は、酪農学園大学と2021年に包括連携協定を締結し、外部講師として授業を行うほか、研究室との共同プロジェクトを推進するなど、農業に関心を持つ学生への教育に携わっています。

2022年には、北海道で初めての産学連携によるドローン教習コース「酪農大コース」を創設。ドローンを用いて持続可能な農業の実現に貢献する人材を輩出しています。

2024年には、農畜産物を有効活用するための加工と循環を研究する食物利用学研究室と共同で、「ヒンメリプロジェクトランチ」を開催しました。ヒンメリプロジェクトとは、

同大学で栽培されたライ麦の麦わらを材料に、フィンランドの伝統的工芸品「ヒンメリ」を制作する同研究室の取り組みです。麦作の副産物を活用しヒンメリに豊穡への願いを託すこの取り組みを、もっと多くの方に知ってほしいという思いから、当社は2024年度のヒンメリプロジェクトに携わりました。

札幌市円山地区で当社が運営する多目的スペース「Know Gallery」を、一時的に大学のランチに見立て、学生が制作したヒンメリの展示を学外で初めて行いました。3日間の会期中は、ヒンメリづくりを体験できるワークショップや、酪農学園大学がプロデュースした加工食品の販売などに学生が携わり、地域住民を中心に300名以上が来場し盛況となりました。





無人航空機を活用した新事業

橋梁点検

2014年以降、橋梁やトンネルには5年毎の定期点検が義務付けられています。従来、これらの点検は作業員の近接目視で行われることが多いですが、高所での作業は危険が伴う上、近年の人材不足もあり、省人化が強く求められています。北日本スカイテックでは、農業分野で培った無人航空機の操縦技術を生かし、ドローンを活用した橋梁点検サービスとして、橋脚の画像撮影と画像合成を2022年より請け負っています。新しい点検技術を、



自治体や土木事務所の職員など多くの関係者に知っていただくため、札幌市や北広島市内の橋脚を対象とした点検作業のデモンストレーションを実施しているほか、点検に関する講習も対応しています。

治山事業

北海道胆振東部地震によって大規模な土砂崩れが発生した安平町では、山の斜面を緑化する治山工事が行われています。北日本スカイテックは、2022年から2024年までの



3年間、産業用無人ヘリコプターを用いて牧草の種子や肥料などの散布を行いました。勾配のきつい斜面に対して機体の高度を一定に維持しながら、均一に種子等を散布するのは容易ではありません。経験豊富なオペレーターとナビゲーターが、安全を考慮しながら丁寧に作業を進めました。その技術に、自治体からは「斜面の緑化を効率よく進めることができる」との評価をいただいています。

物資運搬

北海道胆振東部地震の復興に関する取り組みは治山工事だけではなくあります。北日本スカイテックは、土砂崩れの被害を受けた現場で、ドローンを利用した物資運搬のデモンストレーションを2023年から2年連続で行いました。

林業には、車輛で持ち込んだ苗木を植栽地まで人力で運ぶ「苗木運搬」という工程があります。この業務の効率化を図り、腰痛等の労災のリスクや労働負担を低減するため、ドローンでの苗木運搬が全国的に導入され始めています。

デモンストレーション当日は、地上40メートルほどの高度までドローンを上昇させ、吊り上げた苗木約80本を100メートル先のポイントで降ろし、再び離陸地点まで戻ってくる作

業を実演し、多くの林業関係者の皆さまにご覧いただきました。サングリンググループでは、農業外のさまざまな場面においてもドローンを通じた社会貢献をめざしています。



紙面では紹介しきれない事例もあります。サングリンググループの取り組みは、各社のWebサイトで随時発信していますのでぜひご覧ください。

今後も農業に軸足を置きながら、さまざまな場面で地域社会に貢献できる企業をめざします。



▲サングリン太陽園 Webサイト



▲北日本スカイテック Webサイト

